

[S-9] 「センサ特集号」と上田初代会長の 逝去

宮崎 栄三

東京工業大学名誉教授
〒152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1

(2017年10月2日受理)

昭和58および59年度(4巻&5巻)の二期編集委員長を務めました。発行号数はそれぞれ、4、および5冊でした。その中で印象深いのは4巻の「表面物性とセンサ」と題する特集号です。当時、センサの重要性が指摘されており、前年、開催された二つの国際会議、すなわち、化学センサ国際会議(福岡市、九大)および第2回固体センサ・アクチュエーター国際会議(米国、Case Western Reserve 大)などの流れに沿った号で、馬場副委員長のご努力の賜物です。これには号の数が存在せず、特集号を強調するために表紙はピンクにしました。AIの隆盛はセンサの重要性を益々高めています。実際、その後、荻野委員長のときに、「化学センサの現状と展望」と題してさらなる特集が組まれました(27巻、1号)。

昭和59年(1984年)8月1日、上田隆三初代会長が心筋梗塞により突然亡くなられ、茫然自失致した記憶があります。先生とはあの木屋ビル2階の事務局にて理事会などで度々お会いしました。その国際性の高さに驚きましたが、これは英、米における長い研究経歴に基づくことと後程知りました。弔辞を清山哲郎第二代会長に、また、追悼文を難波義捷理事にお願い致しました(5巻、3号)。

なお、真空学会では、昭和33年より40年まで永きにわたって浅尾壮一郎氏(東芝)が初代会長を務められたと聞いております。今回の両学会の合併を機に、両先生の顕彰の意味を込めて事務局にお写真を掲載されてははいかがでしょうか？

最後に、全国から多くの有能な編集委員の先生方の熱意あふれる編集業務に対して編集責任者として、心から感謝の意を表したいと思っております。

[E-mail: miya103@jupiter.ocn.ne.jp]

[S-10] 皆で取り組んだ Web 投稿の開設

重川 秀実

筑波大学数理物質系
〒305-8573 茨城県つくば市天王台 1-1-1

(2017年10月3日受理)

2010年、2011年度に編集委員長を務めさせて頂きました。今では当たり前になっています Web 投稿ですが、当時は原稿の投稿や査読、印刷所とのやりとりなど事務局の大変な作業に支えられていました。こうした負担の軽減を含めてシステムの見直しを委員会で議論した結果、思い切って近代化?をはかり、Web 投稿への移行に取り組むことになりました。全くゼロから手探りで立ち上げで、HPの整備に始まり、投稿規定の作成、印刷所との交渉、マニュアルやテンプレートの準備、J-Stage を利用した論文公開など、皆で忙しく過ごした日々が昨日のように思い出されます。新しいシステムを導入するためには、プログラムを一つ一つ追って新しい仕組みの詳細を全員で共有することも必要でした。慣れないことが多々あり不安な時期もありましたが、笹川委員のご尽力により鬼怒川保養所合宿が実現し、委員の皆さんや事務局の参加を得て、無事、路を拓くことができました。合宿の夜、夕食に集まったときの写真が見つかりました(Fig. 1)。皆で盛り上がり遅くまで語り合った楽しい時間は、今も、かけがえのない大切な宝物です。

会員の皆さんへの公募により会誌の表紙を一新したのもこの頃です。学会の活動は、こうした多くの隠れた力により成り立っています。研究への思いを繋ぐ仲間とし



Fig. 1. (color online). Commemorative picture of the study camp at Kinugawa Kegonso rest center (Jan., 2012, taken by A. Itakura).

て助け合い協力し夢あふれる学会に盛り立てていきましょう。

[E-mail : hidemi@ims.tsukuba.ac.jp]

[S-11] 学会の窓・世界の今・世界の窓

高柳 邦夫

東京工業大学名誉教授

〒152-8551 東京都目黒区大岡山 2-12-1

(2017年10月3日受理)

「表面科学」が名前を改めて「表面と真空」となると聞きました。この新学会誌が国際的に飛翔することを期待して、元学会長としての希望を添えたいと思います。

会長として、学術性・国際性・社会性を学会の理念として訴えてまいりました。学会誌においても同様です。今後もさらに皆が“見たい・言いたい・聞きたい”話を盛り込んで、新学会の“窓”としての役割を期待します。

さて、Natureなど商業誌を見ると、新しそう・面白そう・不思議そうな話題が次々と掲載され、善悪は別として、朝礼暮改の勢いで研究が進んでいるように見えます。そのような“世界の今をにぎわす話題”も、その出発点となる科学概念や技術概念は、10年～30年ほど前の“世界の今”に遡ります。新学会誌においても、将来につながる“今の話題”を見逃さず、それらの掲載に力を入れて欲しいです。それらが芽となって多くの成果に結実していくのですから。

学会誌は、過去・現在・将来の動向を会員に的確に伝える役目を担っていますが、とりわけ新学会誌は、“若い研究者を育てる”役割を強力に担ってほしいと思います。そのためにも、“世界の今”を伝えるメディアの選択が重要です。これからのIoT・AI時代には、会誌出版は書籍ではなく、タブレットやスマホに登録された「お好み」からアクセスされるのでしょうか。新会誌が時代のメディアを取り込み、若い世代を取り込み、彼らが最先端研究を牽引して、新しく“世界の今”を拓いていくというストーリーに期待します。

今後、激流や急流をへて大海にそそぐ川の流れのように成長していく新学会誌を見守りたいと思います。川の流れが学会の理念・大義・信念を次世代さらに次々世代に伝え、繋いでいくことを祈念します。

最後に、平成18年度～21年度(2006～2009)の理事

の先生方や会誌編集委員長の荻野俊郎先生、庭野道夫先生をはじめ、上村恵美子事務局長に感謝申し上げます。会員として、学術性・国際性・社会性を備えた学会と会誌に“世界の窓”の役割を期待して接していきたいと存じます。

[E-mail : takayang@pa2.so-net.ne.jp]

[S-12] 初期「表面科学」編集委員会について

福田 安生

静岡大学電子工学研究所名誉教授

〒432-8011 静岡県浜松市中区城北 3-5-1

(2017年10月5日受理)

私は1981年、6年弱の滞米生活に区切りをつけ帰国して表面科学会に入会しようとしたところ、しばらく様子を見た方がよいと諸先輩に助言された。それで入会はしなかったが講演大会には出席していた。1983年になって旧知の宮崎栄三先生(当時、東工大)が「表面科学」の編集委員長に就任され、編集を手伝うようにとのおおせで編集委員となった。1981～1985年は年4号発行で1986年から年6号、1988年～1994年には9～11号発行となった。当時は個人の編集者に編集作業をお願いしていたが、発行部数が増加するに従い、個人での編集作業が困難となり、1990年のNo.6から本郷にあった(株)エヌ・ティー・エスに編集委託した。1986年のNo.4から初めて本郷の現事務局で編集会議を開いたが、それまで事務局は向丘の木屋ビルにあり、3畳ほどの狭いところだった。そこでは多人数の会議は不可能であった。そのため編集会議は編集委員長が関係場所を探し、転々として開催していた。1991年のNo.3から御茶ノ水の三田出版に編集作業を委託した。学会誌は月刊誌であることによって価値があるとの認識は会長はじめ学会幹部の共通の認識であったが、資金的にかなり困難であった。当時、熱川にある理科大の厚生施設に泊して「熱川会議」を開き、学会の将来計画を議論していた。そこで学会創立15周年にあたる1995年から思い切って月刊化することを決めたと記憶している。しかし、年12号発行は資金的にかなり苦しく、年9号と変わらない金額でなんとか発行できないかと会長の河津璋先生(当時、東大工)と真夏に汗を垂らしながら三田出版に交渉に出かけた。窮状を説明したところなんとか従来と余りかわ